

問題と目的

子どもを育てるということは、心理的・身体的に負担がかかるものである。服部・原田(1991)は母親の傾向として、育児熱心は育児不安と容易に連動しやすいものであると述べており、完全主義と育児ストレス・育児不安は関連があるといえる。完全主義の概念として、自己に完全性を求める自己志向的完全主義があり、完全主義の基本的な性質をあらわす「完全欲求」、自分に対し高い目標を課す「高目標設定」、自らの課題のできばえに対して常に漠然とした不安をもつ「行動疑念」、失敗を過度に恐れる「失敗過敏」の4つの下位尺度に分かれる(桜井・大谷, 1997)。三重野・濱口(2005)は自己志向的完全主義がほとんどの育児ストレスに影響を及ぼすと述べている。

また、育児ストレスを軽減するものとしてソーシャルサポートを挙げることができ、これまで多くの研究がなされている(住田, 1999等)。近年ソーシャルサポートの効果についても、受け手のパーソナリティを考慮する必要性が指摘されている(荒牧・無藤, 2008等)。長沼・浦(2005)は自己志向的完全主義に焦点を当て、育児ストレスと「がんばらなくてもいいよ」という受容的サポートとの関連を検討した。その結果、行動疑念傾向や失敗過敏傾向が高い母親は受容的サポートを多く受けても育児ストレスは高いままであった。この研究では受容的サポートについて検討されているが、今まで研究されてきた、情緒的・情動的・道具的サポートについては、完全主義や育児ストレスとの関連が明らかにされていない。よって、本研究においては、自己志向的完全主義と情緒・情報・道具的サポートおよび育児ストレスの関連を検討することを目的とする。

方法

- 1. 調査対象：**A市主催の乳幼児健康診断(1歳6か月児、3歳児)に参加した養育者に質問紙を配布し、124名(72.9%)から回答を得た。この内、無回答項目が著しく多かった6名を除外し、118名(69.4%)が分析の対象となった。女性117名、男性1名。平均年齢32.8歳($SD=3.9$)。
- 2. 調査期間：**平成22年6月、8月、10月。
- 3. 調査方法：**事前に各家庭に郵送される健康診断の間診票に質問紙を同封し、回収は各会場で行った。
- 4. 質問紙の内容：**①自己志向的完全主義尺度：「新完全主義尺度(20項目、6件法)」(桜井・大谷, 1997)を用いた。②育児サポート尺度：細野(2004)、久保(2001)等を参考に作成した。全11項目、4件法。サポート源は、家族、友人、専門家。サポートの種類は、情緒、情報、道具的サポート。③育児ストレス尺度：清水・西田(1999)を参考に作成した。全14項目、5件法。

結果

育児ストレスを従属変数とする自己志向的完全主義(高低)と育児サポート(高低)の2要因分散分析の結果、5点において交互作用がみられた。1点目に、失敗過敏と家族からの情動的サポートにおいて有意な交互作用がみられた($F(1,105)=5.27, p<.05$)。単純主効果の検定の結果、家族からの情動的サポート高群において、失敗過敏高群の方が低群よりも有意に高い育児ストレス得点を示した($F(1,105)=8.38, p<.01$)。2点目に、失敗過敏と家族からの情緒的サポートにおいて交互作用の傾向がみられた($F(1,107)=3.11, p<.10$)。単純主効果の検定の結果、家族からの情緒的サポート高群において、失敗過敏高群の方が低群より

も有意に高い育児ストレス得点を示した ($F(1,107)=3.96, p<.05$)。3 点目に、失敗過敏と友人からの道具的サポートにおいて有意な交互作用がみられた ($F(1,107)=5.15, p<.05$)。単純主効果の検定の結果、失敗過敏高群において、友人からの道具的サポート高群の方が低群よりも有意に低い育児ストレス得点を示した ($F(1,107)=5.09, p<.05$)。4 点目に、失敗過敏と友人からの情動的サポートにおいて交互作用の傾向がみられた ($F(1,108)=3.77, p<.10$)。単純主効果の検定の結果、友人からの情動的サポート低群において、失敗過敏高群の方が低群よりも有意に高い育児ストレス得点を示した ($F(1,108)=6.73, p<.05$)。5 点目に、行動疑念と友人からの情緒的サポートにおいて交互作用の傾向がみられた ($F(1,106)=3.36, p<.10$)。単純主効果の検定の結果、友人からの情緒的サポート低群において、行動疑念高群の方が低群よりも有意に高い育児ストレス得点を示した ($F(1,106)=14.11, p<.01$)。

また、専門家からのサポートと自己志向的完全主義においては、交互作用はみられなかった。

考察

家族からの情動的サポートや情緒的サポートを多く受けていると認識していても、失敗過敏傾向が高いとその傾向が低い親よりもストレスが高いことが示された。失敗過敏とは失敗を過度に恐れること(桜井・大谷, 1997)であるが、情動的サポートや情緒的サポートは、援助を必要としている人に代わり問題を解決するものではなく、実際に問題を解決するのはその本人である。そのため、失敗過敏が高い親は家族から情動的サポートや情緒的サポートを受けていると認識していても、失敗に対する恐れは消えず気にしてしまうため、育児ストレスが高いと考えることができる。

また、失敗過敏傾向が高い親でも、友人から道具的サポートを多く受けていると認識している人は、少ないと認識している人よりも育児ストレスが低い状態にあることが示された。本研究にお

いては2時点において育児ストレスの変化を検討していないため、「道具的サポートにより、育児ストレスが軽減する」ということは明らかにされなかったが、道具的サポートが失敗過敏高群に対しストレス軽減効果をもつ可能性を考えることができる。失敗過敏傾向が高い親に対しては、他者が本人に代わり対処行動をとり問題を解決するサポートが効果的であると考えられる。

また、失敗過敏傾向が高い人は低い人よりも、友人からの情動的サポートをあまり受けていないと認識している場合において育児ストレスが高い。失敗過敏傾向が高い人は、「ささいな失敗についても過度に気にし、失敗を恐れる」という特徴を持っており、この傾向が高い人は小さなストレスに対して脅威を感じるだろう。この傾向が高い人が、情動的サポートをあまり受けていないと認識している場合、ストレスへの脅威は育児ストレスにつながりやすいと考えることができる。また行動疑念傾向が高い人は、友人からの情緒的サポートをあまり受け取っていないと認識している場合、行動疑念傾向が低い人に比べ育児ストレスが高い。認知的評価・対処理論によれば、対処段階において何らかの対処行動をした場合、その行動が問題を解決できていると感じることができた場合にストレス反応につながりにくい、とった行動が問題を解決できていないと感じた場合にストレス反応につながりやすい。行動疑念は、自分の行動に対して常に漠然とした不安をもつことであり(桜井ら, 1997)、自分のとった対処行動に不安を抱きやすい。そのため、友人からの情緒的サポートが少ないと認識していれば、行動疑念傾向が低い人よりも育児ストレスが高い状態になると考えることができる。

今後の課題として、自己志向的完全主義の4つの下位尺度内の関連についても明らかにし、4下位尺度がどのような関係にあるのかも考慮していく必要がある。

主任指導教員	有園博子
指導教員	岡村寿代